

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'77

冬

連絡先

東京都渋谷区代々木二二二ー一

婦選会館内

〒151

発行 一九七七年十二月十日

運動を盛り上げよう

半田 たつ子

黒雲が、今急速に日本の社会を蔽っていく。「サンデー毎日」7・31号の「女の先生はやっぱりダメだ！」の特集。三好京三氏がヤクルトの宣伝に書いた「21世紀（実は18世紀）への手紙」（朝日新聞8・7付掲載）。最高裁判事山本厚氏の「ボロクソ判決を書いて笑うなよ」（女性の）生理休暇も取り上げ深夜作業もさせるか」の放言（朝日新聞「ひと」欄8・24付）。小学館「高校教育展望」九月号に至っては「性差に応じた教育こそ男女平等」との編集方針で、高校長協会家庭部会理事長に就任した佐田彌氏に大論文を書かせている。一連の状況に自信を得た佐田氏は、漸くテレビ長時間討論（9・24）に踏み切り、最新の「家庭部会報」にも件の大論文を載せている。両性が、人間らしく生きうる教育の実現をこそ願う私たち。刮目して黒雲の正体を見破り、運動を盛り上げるべき時である。

もくじ

運動を盛り上げよう	(1)
集会のお知らせ	(1)
一〇・八集会報告	(2)
男女共学の食物学習	(5)
家庭科・技術科の共修をすすめるために	(6)
家庭科教員養成に想う	(7)
世話人会報告	(8)
「男子に家庭科は必要か」放送される	(9)
放送の反響	(12)
放送をみる	(12)
出演して思うこと	(13)
古さと新しさが歴然としてきたこのごろ	(14)
名古屋の教育委員会は共修に冷淡	(14)
「あごら」集会でアビール	(15)
大阪の「男女共修」の運動	(16)
出版のお知らせ	(16)

集会のお知らせ

とき 一月一四日（土）
午後一時半～四時半
ところ 婦選会館
（電話〇三・三七〇・〇三三八）
テーマ 生徒が語る家庭科共修

家庭科の共修について、一番関係のある生徒自身はどんな意見を持っているでしょうか。中学・高校で共修を経験した人、しない人はそれぞれどんな見方をしているのでしょうか。高校生・高校卒業生を招いて、話し合ってみよう。皆様がふるってご参加ください。

一〇・八 集会報告

テーマ 中学の「技術・家庭科」の共修をどうすすめるか

前回（七・二集会）の討論では技術科に問題が集中しました。そこで技術の先生をお招きして卒直なお考えをうかがうことにしました。

「技教連・原正敏氏のお話（要旨）」

私は技研連の代表委員になっていますが先ず技教連が家庭科についてどう考えているかという点、家庭科のことは全然念頭においてないということがあります。

技教連というのは小・中・高を通しての技術教育・また高校の職業教育の中の技術教育や職業訓練所のそれを如何に構築していくかの構成をどうするかを考えるのが研究対象で、したがって会そのものの方針として家庭科教育をどう考えるか議題として取り上げたことはありません。ただ女子が技術教育において差別されている、これを男子に近づけたと考へてはいるので、家庭科との関わりはそれに尽きるわけです。

家庭科教育の共修をどうすすめるかという点、それは基本的にどう考えるか、又現実に学習指導要領が公示されている中でどう対応できるか、二つに分けて考えてみたいと思います。

今回の学習指導要領で危惧されることは、教科構造として小学校に家庭科があり、中学に、家庭技術科（技術・家庭でなく）、高校に家庭一般があるのではないかということです。何故ならば中学二・三年の技術科が三時間から二時間に減った。これは他に類をみない激減である。しかるに小学校の家庭科は減っていない。それで小学校の家庭科と中学の技術・家庭科をプラスして総時間数で割れば減り方は他の教科並みということになります。（これは教課審のある先生も云っております）

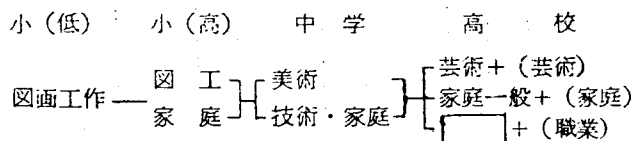
以上のことから考えると教課審の先生方は小学校の家庭科、中学の技術・家庭科、高校の家庭一般は同一教科と考へているのではな

私はそういう風な意味で日本ほど家庭科が大きな顔をしてのさばりかえっている国は世界でどこを指してもないと思っています。だから家庭科をうんと減らさなくてはならないと正直考へているわけです。

今回の指導要領の中で最もおかしいことは小学校の図画工作と中学の美術が殆んど同一目標になっていることです。そもその成り立ちからいえば図画工作の工作の部分が分かれて技術・家庭科に吸収されたわけです。美術と図画工作がイコールだとすると小学校段階の、物をつくる側面は家庭科にもつてきていくということになる。それなら小学校の家庭科を技術・家庭科とすべきでしょう。

小学校と高校をそのままにして、中学の技術・家庭が相互のり入れしたのは運動の成果だというのはどんなものだろうか――

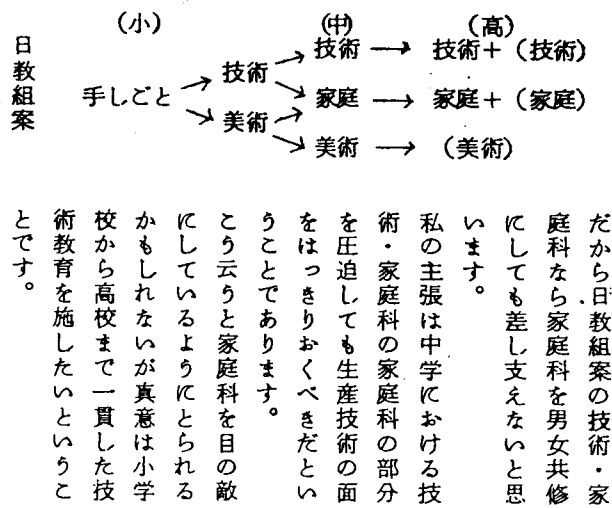
私が今の教育で一番欠けていると思うのは小学校の工作、物をつくる側面で



です。これをどうやって打開するか、それは現行の図画工作の一部と家庭の一部をとってつくるしかないと考えています。

同じ様に、高校の技術教育をどのように構築していくか（図の□の部分のところ）これに対して一昨年、日教組の教育課程検討委員会が一つの試案をつくりました。

私はこの案に参画していたわけではないがこれまでの教育論から云えば画期的なことで国際的な線に現行よりは近づいていると評価しています。



しかし現行は小学・高校に技術は存在しない。としたら中学の技術・家庭の家庭の部分減らしても技術の分野を確保しなければならぬ、家庭科の時間がふえることを厳に戒めなければならぬと思うわけです。

ただ現実的には技術・家庭科は男の先生と女の先生と二人で担当しています。俺は俺、お前はお前とけんかするわけにはいかない。私たちとしては女の先生とも仲よくして、できるだけ技術教育の本質をそこをわなないようになつていきたいと思います。

以上のように矛盾の多い技術・家庭を具体的に共修するにはどうすすめたらいかに入ります。

学習指導要領によると17の領域から男子はA/Eまで5領域、女子はF/Iの5領域となつているが、これは原則であり、私としては男子はそのまま、女子はF/Iまでの5領域を減らし、その分をA/Eの1領域以上をつけ加える、これを技術の先生ががんばって家庭科の先生を納得させてやる以外ないと考へています。技術教育の立場から云えば、中学における家庭科教育にちょっと引込んでもらいう以外ないというのが卒直な考へであります。

また高校の家庭科について云えば現行の内容で二単位必修かどうかかわからないが、高校高学年に入れるくらいなら、それをけずって高校へ廻し、高校男子にも料理を教えた方が現実的だと考へています。

以上のお話のあと質疑応答に入りました。

質疑応答

Q 技術教育の必要性について何故、小学校段階から声をあげないか。

A 家庭科ばかりを敵とすることは無いと思うが……

Q 私は図画工作を一ばんの敵としているのだ。図画工作は美術偏重になつている。日本の教育は芸術過多だ。もっと勤労体験的なもの、物をつくることを重視すべきだ。

A 中教審や中産審の高校教育における職業教育の改善についての答申があるがそのフォローはどうなっているか。

Q 教課審の審議のまとめでは職業教育云々は将来のこととして……とあり最終答申ではその項もけずられていた。

A それは校長会の圧力だ。校長会の僅か7%が職業教育に賛成したにすぎないのだ。

Q 中学の技術課程の時間が減ったのは内部

的欠陥があったのではない。

△ 反省するほど存在しなかったと思う、まともな技術科がおかれたことがないのだから。先ず時間の確保と金の確保。職業教育のニードは大きい。しかし金をかけないでやっても必らず失望される。

産教連・向山玉雄氏のお話(要旨)

私は家庭科の共修をすすめる会のはじめから強い関心を抱いてきたものです。

というのは、子どもの都立高校の文化祭のチラシにこんなのがあったからです。

家庭科は共修にしよう。何故女子だけ家庭科を学ばねばならないか。何故女子だけ一課目余計テストをうけなければならぬか、これは差別ではないか。という内容でした。それに対して男生徒が自分たちが教わっていないから差別だという声はきかれませんでした。

しかし女子が技術を学べないという差別はある。そのために女子は将来、職場に入るとき低賃金につなっていくのではないか、このことでは共学をすすめる大きな意味がある。

小・中・高で勤労教育を教えることは重要です。だからもっと小さい小学校段階からはじめるべきだと思います。

また人間の発達の中で手を使う教育の課程

を除いたら教育の課程は一面的になってしまっている。そういう点から考えると今の家庭科の内容は子どもの手の発達に見合っているだろうか。

家庭科は発達に見合っていない、これでは教科を構成しないと思います。また今日の発達した技術文明を系統的に学校で学ばないと大人になってから不利益を蒙るでしょう。

質疑応答

Q 中学の相互乗り入れについて……

A 家庭科教材を男子に教えていいというのは大きな変化。しかし技術科からみれば非常な後退。しかし現実的には相互のり入れは男子は食物、女子は木材加工に限定されそう。しかし現行の指導要領でも自主編成し共学を実施し成果をあげている所もある。新しい指導要領がはじまったら早い時機、すべての教師が共学を実践し実証していくべきだ。

Q 共修をすすめる会では技術科と家庭科を分離して共に共学にすべきだという統一見解を出しているが……

A 技術科サイドではまだそこまで細かく検討していない。とにかく女子にも技術を学ばせたいという共学優先。一領域相互乗り入れという一領域は困る。全領域だ。男子は減らしても女子は数領域とってほしい。

Q 自分は技術科の教師だが中学でもう八年

も前から共学をやってきた。今回の相互乗り入れは共修をすすめる会の運動の成果だと思いが、われわれは文部省と生きているのでなくて子どもと共にあるのだから自主編成してできるところからやってみようではないか。

Q 現にある技術・家庭科はおかしい。矛盾だと思ふのなら、技術科だけにあまりこだわっては何も解決しないのではないか。家庭科サイドとしてはできるところから共闘していくと呼びかけたい。

A それについては異論ありません。

(文責・嶋田道子)

おねがい

◇七七年度会費をまだ納入していらっしゃらない方は至急お納めください。

◇納入はできるだけ郵便振替でお願いいたします。

振替番号は東京九・一九一八五一です。

◇原稿をどうぞ。特に地域の状況をお知らせください。ただし、なるべく短くまとめてください。また、(一ページは四〇〇字詰原稿用紙約三枚半です) なお、できるだけタテ書きでお願いします

☆ 質疑の時に、一之台中学の熊谷穰重さんから共修の食物学習について報告がありました。技術担当の男の先生も食物学習についての考え方、授業のすすめ方は、共修をすすめる上で大いに参考にしていただけではないかと思ひます。

男女共学の食物学習

熊谷 穰重

男女共学で食物学習の授業を行って来たことについて男の先生にも自信をもって実行できることについて書いてみました。

私は食物学習を次のように考えていますが根本的に間違っているでしょうか、木材加工、金属加工、機械加工、電気の学習にしても、材料(素材)があり、この材料に工具や機械を使って、手や頭の労働を加えることによって人間にとって価値のあるものに高めています。食物学習の手打うどんにしても、小麦粉という材料に、ナベ、ガス、ほうちょうという道具を使い、手と頭を加え、手打うどんというおいしい価値あるものを作り上げているのです。いうなれば加工学習の一列と考へます。材料が木材や金属でなければ技術教育とは言わないのでしょうか。いいえ、決して

そんなことはありません。材料が米でも麦でもジャガイモでも原理は同じです。ですから私は男子にも女子にも食物学習や布の学習は必要であるばかりでなく教育の基礎だと思つて進めて来ました。御批判を乞う。

私の食物学習の概要を簡単に書いてみます。まず人間の体は何から出来ているかを話します。炭水化物、たんぱく質、脂肪、水、炭酸カルシウム、ビタミン、その他、するとこれらはどうしても必要であることを知る。

次にこれらは栄養素といひ、どんな食物に含まれているかを知り、それらを取ることに意義を知り、炭水化物の含んでいるものにはどんなものがあるか代表的なものとして小麦粉を選び、小麦粉の種類を知りグルテンを教え、薄力を使って手打うどんを作つて食べてみる、

味は、硬さは、色は、市販されているものにくらべ、漂白剤、防腐剤の話をし、風邪をひいた時とか、お年寄りのいる家、年末・年始には必ず作つて食べなさいといひ、家で作らせたことについての反省文をかかせる、必ず両親や祖父母から感謝されたとの返事が帰ってくる、うれいすね。次にたんぱく質として卵の卵白の気泡性を利用してカステラを作つて試食します。手打うどんの時もカステラの時も、先生方をお呼びして共にこの美味

をあじわつて共に手作りのおいしさを感じずる一時を作っています。これらは何年も行っているで勘でわかるようになりましたが、いつでも出張指導いたします。御遠慮なく御連絡下さい。これからは日本古来のミソ作り、醤油作り、納豆作り、豆腐作りを手をのばしたいものだと思ひます。食物の学習のプリンとまだあります。御希望の方にお送りいたします。

布の学習は厚さ1cm位の杉の板一人一枚大きさは10cm×20cmに切つて両端に長さ12cmのクギを5か所おきに打つて縦糸をわたし、一本一本横糸を入れて布を作る。クシでもって糸をよせる。全部出来あがつたところで両端をとめて一枚の布にし、数名分を合せてクッションの大きさにし中に綿を入れて卒業時に担任の先生に贈り物としてさしあげる。

10cm×20cmの布は赤や黄色や緑があり、その中に生徒のイニシアルが刺しゅうされており、心暖まる品だと言われました。男の私が食物学習を、家庭科の先生が布の学習を去年は行いましたが、両方共私がやったことも何回もありました。何か参考になればと恥を忍んで書きました。全国のどこかで御役に立てば幸いです。正しい食物学習、布の学習に頑張ります。

☆ 会場では、お二人の技術科の先生にお話し。普通教育における基礎的な技術教育とは、家庭科の目標は、憲法に定める「健康に生活していただく」が、ここでは家庭科が専門の方のご意見もご紹介いたします。中学で家庭科共修の実践をすすめて来られた家教連の鯨井あやさんにお話ししました。

家庭科、技術科の男女共修をすすめるために

鯨井 あや

現在の日本の教育制度の中で、技術教育は中学校に「技術・家庭」として、男子だけが履修する教科があるだけで、小学校も、高校も普通科では設けられていない、したがって女子には、全然必要がないものとされ、義務教育の中に男女差別をもちこみ、憲法、教育基本法に違反を犯している問題教科である。

今の子どもたちが、遊ぶことも、働くこともできない、不器用、消極的、無気力と心身共に極めて異常な状況があらわれていることは、誰もがみとめ憂慮していることである。この原因は、こどもの発達を阻害する環境の問題によることは明らかで、この対策については広く、日本の社会全体の緊急課題ではあるが、今の学校教育が進学体制の中で「労働」「技術」の教育が欠けていることに起因することが大きいといわなければならぬ。

技術科と家庭科は、人間の発展にかかわって、技術の本質を追求するということで統一的にとらえ、生産技術や生産のしくみを中心において、人間の生命維持にかかわる内容を技術教育として一本化するという主張もあり、家庭科の中味を部分的に、技術的視点で編成する試みもなされているが、現段階では、両者は、学習の対象とする領域や系譜に各々特性があり、統一することには無理がある。

先生が生み出されている。家庭科という教科は、戦後の新しい教育の柱として、民主的な家庭をつくる原動力になるはずであった。しかしこの三十年にみられるように、高度経済成長、科学技術の革新にのっとられた教育の中で、「男は仕事、女は家庭」の旗ふりとなっていました。それらが曲り角どころか壁につき当たった今、私は別の旗ふりになるべきだと思う。「男も女も、女も男も、自分たちの生活、未来の生活を展望しよう」と。

家庭科教員養成に思う

香川 敦子

☆ 今回の集会で技術科の共修をテーマにとり上げたのは、前回の集会で特にそのことが話題になったからですが、前回には、教員養成のあり方も同時に問題になりました。その時の発言者、香川敦子さんにご意見をまとめていただきました。

家庭科を男女共修にすることについて意見をきくと、理解のある人でも多くは「当然男女共に学ぶべきです、しかし、まだ今は無理でしょう、家庭科の先生方も困るのではないかしら」という答が返って来る。家庭科の先生のつくられ方を考えると、私には、未来永劫共修にはならないという想いがはしる。家庭科に限ったことではなく、教員養成の問題はいつも論議され、方向づけられ、不安がられる。昔の師範教育というシステムに対する嫌悪と郷愁。それを断ち切ったはずの、新制大学制度の中の教員免許のあり方、教員養成を目的とする教育系大学と、教育学部。そうした多様性の中に師範教育の持たれた嫌悪と郷愁が拡散していった。そして今も昔も、本当の意味でのいい先生と、そうはいえない

家庭科の目標は、憲法に定める「健康に生活していただく」と「婚姻の成立維持における個人の尊厳と男女の平等、相互協力」の規定を現実的に保障することをめざしており、1、人間が生きていくための衣食住の確保、2、家族の維持、発展のための生殖、保育、教育、3、民主的家族（家族、経済）づくりを対象としている。家庭が崩壊し、生活が極度にびやかされている現状で、その回復をはかり、発展させるための科学と技術を習得させることは男女を問わず必要である。家庭科という技術とは、生活文化ともいえる祖先から伝えられたやり方を学ぶことが多くその手法にかかわって、何のために、なぜそうするか、原理、原則を認識させて、生活をきり開く、実践力を養うことである。技術科も、家庭科も、こどもの発達に欠かせない重要な役割をはたす、男女共に履修する必修教科でなければならない。

1・1・1・1・1・1・1・1・1・1

技術・家庭科の共修をすすめるためには、もともと技術の先生といっしょに話し合うことが必要なのではないでしょうか。

各地域、各学校でも、できるだけ話し合いをすすめてくださいますように。（編集部）

の学部と同等に大学としての研究と教育を進展させるためには、教員養成ということとは、なるべく手を切って、学問らしい体系へと、あせったことには当然の理由があると思われる。家庭科の教員養成は、教育学部、教育学部が担うのだという一種の差別意識があったのではないかと思う。しかしながら、教育学部は、主として古くは女高師系から、新しくは、家庭科教育を切り捨てた家政学部から供給されている。また、家政学部がそうであるように、農学系、工学系その他の分野から供給されている。私は、家政学、家庭科教員養成の中に広い分野から参加されることを否定するものではない。それこそ、その現象は、中学・高校での家庭科男女共修の温床になり得る場だと思っている。それらの研究者が、植民地的意識でなく、家族・家庭——実質的な生活——くらし——こども——教育——家庭科教育——婦人問題に、哲学を持たれるならば。

他の教科でも同じように教科教育に対する理解を持たない教師が教員養成にかかわる講義を担当するであろうが、家庭科についてはこのことが問題となる。封建時代からの「女の座」の尻尾を持ちつづけたが、この教員とする現代社会の中の視点を定めようもない家

庭生活に対応する知識・技術・考え方を教える教科であるから、百年、千年とかけて構築されてきた専門分野を基盤とする他教科にはない困難性がある。

それ故に、家庭科教育の問題は、家政学それ自体の中で、刻々と変動する人間生活、その単位となる家族の生活からの、生きた情報を取りこみとりこみ、模索してゆく必要がある。このことが、基礎の弱いといわれる、本質を見失いがちだといわれる家政学の確立につながる一つのルートでもあるのではないだろうか。

家庭科ぎらいの生徒が、家庭科教育無視の家政系に学び、家庭科ぎらいの生徒をそだてる。そして家庭科の教育現場には「女の子は、女の子は」という偏見と、家庭科とは「被服・プラスチック」であるという錯覚が共存する。私は、家庭科教育法という科目についてよく知らないものであるが、それを専門に研究する人は少ないと思われる。観点をかえれば、免許状に必要な科目を担当するのは誰でもできるべきなのである。一般にこの科目は軽んじられ（うとんじられ）非常勤講師によっている場合があるときく。この科目は、単なる文部省の指導要領の忠実な解説と、教育実習、採用試験、就職現場での要領の伝授

に終るなら、前述の悪循環はたちきることができない。この分野について家政系の学問の中で柔軟で幅広い議論が十分につくされて、それをふまえたそれぞれの担当者の深い洞察の結果が若い家庭科教員志望の人々に与えられてほしい。仏つくって魂を入れずではなく、魂を入れる役割を期待したい。

世話人会報告

九月一四日

次のことをきめました。

◇ 一〇月八日の集会について。

（講師、費用、世話人の仕事の分担、宣伝のしかた）

◇ 次の集会について。

（それまでに高校新指導要領案が出ること
を期待して一月一四日とする。高校生、高校卒業生に家庭科について語ってもらおう）

◇ 会報冬の号の発行について。

（内容、スケジュール）

◇ 「あごら」大会でアピールを行うこと。

◇ 高校新指導要領が出たら次のパンフレットを出す。

◇ 都教委、都教組合同で都の教課審をつく

ることになったので、それができたときに都あての署名を持って行く。

◇ 本は一二月には必ず出すようにする。

（梶谷典子）

十月二十二日

NHK TV 長時間討論「男子に家庭科は必要か」をめぐっての反響がまず報告され、次に左記のことが話し合われました。

△次回集会V五三年一月一四日（出）テーマ

「生徒が語る家庭科共修（詳細は1頁参照）

集案内状は二百枚印刷（担当青木）、東

京近郊の高校家庭科教師へ発送。当日、京都、

長野の資料販売。

地方世話人の方へお願い。毎回、遠方から

の参加者が数人。どんどん声をかけ合って

集案に参加して下さい！！

△記録集出版V十二月中に、会の三年間の歩み記録集「家庭科、なぜ女だけ？」をドメス出版社から出版します。（詳細は16ページ）
△その他V色々な集案に参加し、アピール、資料販売を続ける。高校の教育課程改訂への働きかけなどが問題となりました。

次回世話人会は十一月二日（月六時）、新しい資料作成について話し合う予定です。

（馬場洋子）

NHK 長時間討論

「男子に家庭科は必要か」放送される

九月二四日、NHK教育テレビで午後七時三〇分から九時まで「男子に家庭科は必要か」の討論が行われた。

男子に家庭科は必要とする側は和田典子、樋口恵子、荻昌弘の諸氏、男子に家庭科は不要とする側は、佐田強、上坂冬子、楠本憲吉の諸氏であった。番組は、今年の八月滋賀県で開かれた家教連の大会参加者へのインタビューから始まった。それぞれのオピニオン、リーダーは佐田氏と和田氏で、先ず佐田氏が「校長の多く及び家庭科教師の多くは、男子は家庭に関する学習は、倫理、保健、特別教育活動でもできると考えている。実技的なものは小・中でやり、あとは家庭でやるべきだ」と主張、和田氏は、「教室で一緒にやるべきであり、学校教育の中で男女の差をもうけるべきではない」と主張。楠本氏からは「共修にする」と母性教育の内容が薄まる。男子に合わせる内容が低下するし、男子の希望者は一歩しかない、上坂氏からは、「国際婦人年」の時メキシコに行った時も、「男女の

ちがいは認めよう、差別はいけない」というスローガンが会場にはられていた。女子必修の家庭科は基本的な差別ではなく、男女の違いによるものである」という意見が出された。共修賛成派の荻氏からは「現在の家庭科の内容は十分検討してみる必要はあるが、若いうちから、男はこうあるべきだ、女はこうあるべきだと決めるのはおかしい。実技のみであれば選択でも良い」、樋口氏からは、「教育とは現実適応と同時に、よりよい現実を作っていく力を与えるべきであり、現状では男も人間として、一人の生活者として知る権利を奪われている」という意見が出された。

スタジオには十組の夫婦が招かれており、両派の意見が出されてから、家庭科の歴史的な流れが説明され、高校生の調理実習の風景が写し出された。一つは女子のみでやっている白鷗高校の例であり、インタビューされた女生徒は「実習は身につく、楽しい」と言うが、男子が一緒にやらないということに對しては「家庭科は女のものだと思う」と言う。

スタジオには十組の夫婦が招かれており、両派の意見が出されてから、家庭科の歴史的な流れが説明され、高校生の調理実習の風景が写し出された。一つは女子のみでやっている白鷗高校の例であり、インタビューされた女生徒は「実習は身につく、楽しい」と言うが、男子が一緒にやらないということに對しては「家庭科は女のものだと思う」と言う。

と主張、和田氏は、「教室で一緒にやるべきであり、学校教育の中で男女の差をもうけるべきではない」と主張。楠本氏からは「共修にする」と母性教育の内容が薄まる。男子に合わせる内容が低下するし、男子の希望者は一歩しかない、上坂氏からは、「国際婦人年」の時メキシコに行った時も、「男女の

ちがいは認めよう、差別はいけない」というスローガンが会場にはられていた。女子必修の家庭科は基本的な差別ではなく、男女の違いによるものである」という意見が出された。共修賛成派の荻氏からは「現在の家庭科の内容は十分検討してみる必要はあるが、若いうちから、男はこうあるべきだ、女はこうあるべきだと決めるのはおかしい。実技のみであれば選択でも良い」、樋口氏からは、「教育とは現実適応と同時に、よりよい現実を作っていく力を与えるべきであり、現状では男も人間として、一人の生活者として知る権利を奪われている」という意見が出された。

きことがあるのではないか」
佐田氏からは「学校教育ばかりせめていて、自分の責任でやるべきことをやっていないのではないか。生徒の心身の発達に合わせるべきで、男女一緒にやるという考え方は粗暴である。高校時代男子にはもっとやるべきことがある」として、五一年度NHK

Ⅹが行なった調査について示した。その中で「母親のあり方」としては、三、四才位の子供を持つている母親は、「自分の趣味を犠牲にしても子供につくすべき」であるとするのは七四%、女子の将来は「幸せな家庭人」に賛成する者、六六%、高校の家庭科女子に必要とする者、九二%のデータを示し、諸外国でも、家庭科は女子のみ必修だと述べた。

これに対して和田氏の方から、「高校生たちの生活現状をみると夜型の生活が多い。食物についても食べたいものだけを選び、健康については考えていない、鉄、カルシウムが欠乏している。また、女子だけでは母性保護が出来ない。生命の尊さ、命がけで生んでくれた母親に対する尊敬する気持ちも共に学びながら生まれてくる」と現状からの意見が出された。佐田氏からは補足したいとして、「女子の母性教育は、男子とは一緒に出来ない。女子は中学の時から積上げてきたのであるから」という意見が出、樋口氏から「どうして共に母性教育をやってはいけないのか」という反論が出された。佐田氏は「女子は出産の前も大切だし、家庭経営も大切、男子でも必要なのは技術であり、体力も十分でないのでバタバタ倒れる」。樋口、和田氏は「女子こそ体力をつけねばならない、女子の

難産が多い、男女共に体力をつける必要あり、体育の時間に差を設けるべきではないし、体力の土台になる栄養の知識については両者に必要」と反論。萩氏からは「今、家庭に問題がある。それだからこそ、男子にも必要である。若い頃から、男は天下、国家のことを論じることと主眼がおかれすぎている」。佐田氏はこれらに対して「女子の体育が少なくないというわけではない、萩さんのいう父親としての見識を養うことは、家庭科の中ではやっていけないので、別途のことを考えていかなくてはならない」。

萩氏「母性の偉大さは女子に教えると同時に男子にも必要」

佐田氏「社会科でやれば良い」

萩氏「今迄、何故行なわれてこなかったのだろう」

上坂氏「家庭という所は、尊厳とも恥部ともつかないところである。そういう場所に論理を入れたりするのは、非文化的なことではないか」

萩氏「男が台所に入るな、女は外にでるなはおかしい」

樋口氏「家庭科が女子のみということとは、家庭は、女子が責任を持つべきだということとを言ってしまうている」

ここでスタジオの何組みかの夫婦に実際の家庭での役割についてインタビューする。(省略)

続いて話は男女の特性をめぐっておこなわれた。佐田氏は「男女には性差がある」として、出生率のちがい、ホルモン現象のちがい、心理学的にみたらちがい等をあげ、母性愛と父性愛の間には大変なちがいが見られると述べた。父性愛とは、切斷することであり、つき離すこと、自立させることであり社会への窓である。母性愛は、子供との一体感、平等、無差別に育てていきたいという欲求であると定義した。これに対して萩氏から「人間、他人に迷惑をかけない限り何をやっていいと思う。子供をつき離すのは母親がやっても、父親がやってもいいのである。ただし他人に対し、責任と愛情を持つことが必要である。これまでの男らしさ、女らしさは人間としての可能性をちぢめてきた」と反論。樋口氏からは「佐田さんの話は、人生五〇年の時代の話だと思って聞いていた。女の差別というよりも、男はこうあるべきだとして育てられた男たちが仕事を離れた後の姿ほどあわれなものはない。彼らは外出する妻に向かって『今日も出かけるのかね。俺の飯はどうしてくるのか』ときかねばならない。人生八〇年時

代にとって、佐田さんの主張はお互を貫くする」。

ここで「男らしさ、女らしさ」をめぐって何人かのインタビュー内容が紹介された。落語家の春風亭柳朝さんは「男らしい男、女らしい女が少なくなった。昔、男はあんまりこまかいことにこだわらなかつたし、女は控え目で山内一豊の妻のようだった」と言い、クリスチーナ本出さんは「男の子でもキーキ作りの血洗いが好き、あなたは男の子だからだめよなどとは決して言わない。日本では、男女をわけすぎている」と言い、加藤諦三早大助教授は「自分でセーターをあんて女の人にプレゼントしたり、料理のうまい男がいる。本当の男らしさとは何をしようとも男らしいこと。今迄の男らしさ女らしさは、くずれるべきだし、くずれた」と語り、斎藤茂吉氏の妻の輝子さんは「明治の女の人には、かたづけばご亭主の三歩うしろを歩くなど、女らしい人がいました。今はいません。女らしい人がいたら教えて下さい」と切返した。

楠本氏は「男女同権反対、男女分権なら賛成」と言い、人類などという言い方はおかしく、男類、女類といった方が良いとし、男は赤ん坊に言葉を教えられないとも発言、これに対し樋口氏の方から「言葉を教えるのが、

どうして母親でなければいけないのか、それならば、小学校の教師を男がやるのはおかしいと言えるではないか」と反論。ここで再びスタジオの夫婦に「男らしさ」「女らしさ」の質問をする。(省略)

和田氏から、共修の家庭科をやったという感じとかのデータが発表された。(つまらなかつたは、男一七・二%、女一三・四%、残りは大変良かった、まあまあに入る)。さらに、和田氏は「女のくせに」とか「どうせ女だから」という言葉がどれ程女子を貶落させるか、そしてまるでそれを証明するかの様に、女だけの家庭科があると述べた。それに対して佐田氏は「男の子にも必要だが、現在家庭科は四単位に減らされている。女子にはどうしても母性教育が必要だ」

萩氏「それなら、いっそ母性教育科とでもした方がよい。又指導要領にも、女だからやらなくてはならないとは書いてない」

佐田氏「男は別な教科でやれば良い」

和田氏「現実には社会科の中では、家庭科のことはやられていない」

萩氏「お話をうかがっていただいている程、男子に必要だということがわかる」

樋口氏「母性は大切。しかしそれを女子だけにすることは良妻賢母教育であり、良夫

賢父教育も必要。母性は大切といえながらも結局銃後の母たちは、命を守りきれなかつたのです。一人の人間として生きていく力を持つ中でしか、よい子供を育てることはできない」

佐田氏「女性性は家庭の主婦になるのですよ、男子に必要な家庭なり、生活は他の所で検討する」

和田氏「共修で保育をやった男子が、女性の大変さを初めて知ったと述べている。男子にも体験を与えることが大切。衣食住の基礎的なことを知っているのと知らないのでは、職業生活についても大変ちがつてくるのではないか」

上坂氏「先程、良妻、良夫という言葉が出ましたが、父のあり方、母のあり方は自分で考えていくべきで、学校では教える必要はないと思う」

樋口氏「現状が女は主婦、男は職場という風に分かれてしまっているからこそ、もっと幸せな家庭を作るにはどうしたらよいか勉強することが必要」

楠本氏「結婚するということは、プロの主婦になることです。男性は結婚まで間があり、りこうですから、チャンとやりますよ。お父さんは港の外、お母さんは港の

内、子供は船ですよ」

萩氏「楠本さんは独学で家庭科を学び、いろいろな所にお書きになっているようにですね。京都の共修の資料に目を通してみましたが、すばらしい。実際にやってないのに、他教科でやるべきだなどというのは逃げである、教えるべきことを教えきれないでいるのでは、教育者として、教育の失敗を言っていることになる」

佐田氏「他の教科で取上げていくべき、結婚直前の女子には必要なことなのである。」

男子高校、女子高校がいっぱいある、男子高校にむりやりやらせるのは異常だ」

(佐田氏興奮気味) 終

(中嶋里美)

米 米 米

なお、この番組は、長時間討論としては珍しい位反響が大きかったとのこと。

放送が終わったばかりの時には、男性(だいたい酔った声もあったそうですが)からの「男と女は違いのだ」という意味の電話が多く、あとから来た投書では、共修を支持する意見が圧倒的だったということです。

(編集部)

放送の反響

「家庭科教育」誌への投書から

校長協会決議以後、数回にわたる面会交渉を断わられていただけに、佐田氏の出演は「やっとテレビを通じてかなえられた」もの。しかし、佐田氏の主張は相も変わらずの「母性教育」でした。

教師、学生、主婦、他教科教師等、様々な方から寄せられた声は「男子に家庭科必要!」佐田氏が現在の家庭科の危機を説き、女子だけの家庭科を強調すればする程「戦後三〇年の女子だけの家庭科」の失敗の告白になるのだ、という萩昌弘氏の指摘に多くの方がうなづきました。

「それは他教科で」という佐田氏の言葉

は家庭科を空洞化させて、壊滅させることにつながる。「反対者側は、男であり女である以前に人間であることを忘れていた」「楠本、上坂両氏は二人ばやし程度……」「スタジオ参加者で男の人の「家事は女の方がやるべきだ」という発言に「それは年代の概念ですよ」と答えていたが、その概念こそガン」「教育は未来に生きる子供たちのためというところを

どう考えているのか/自分の受けた教育や実情に拘泥すると、未来を失ってしまう」

又、「男女共修の問題がなぜここで出てきたのか説明不足。これは国際婦人年からでも男の側からでもなく、戦後三〇年の女の人生から現実の問題としてあげられているのだ、ということ佐田氏にわからせなければ」反響が示すように「女子のみの家庭科は完全に敗れ去った」。しかし、校長協会決議後、我々との公開討論を避けてきた佐田氏が、自信に満ちた態度で出演した背後を思うと、これを現実化するには、まだまだ相当の力が必要だ、と改めて思いました。

(馬場洋子)

事務局に寄せられた感想
放送を見る

三井マリ子

NHKテレビで「家庭科は男子に必要か」という討論会があると聞いたのは、当日の三日前だった。一人でも多くの人に見てもらいたいと思いついた職場でピラを配ることにした。テレビ放映の日時と発言者を載せ、「みなさんぜひ見ましょう」と結んだ。時々雑談を交わしている仲間の教師四人を私の他に呼びかけ人として記名してもらい休み時間に職員室

に配って歩いた。

私の職場は男女共学の公立高校で、家庭科は女子のみ必修である。家庭科の教師は二人おり、そのうち若い方が呼びかけ人に賛同してくれた。ピラを配っている時さまざまな反応があったのでかいつまんで紹介したい。「ねえ、僕だって研修日にはメシ作ってんだよ」という若い組合執行委員。「だけどなあウチのヤツなんか(外で)動いてもいないくせに家の中のことだつてまともにできないんだ。ヒューズひとつ直せないよ。家庭科なんかやんなくたってその気になれば俺の方が家の中のことをずうっとうまくできるよ。ただしオッパイがないから子どものコトだけはできないってことよ」と息まぐ中年の英語教師。「家庭科は選択にすべきよ。男も女も必修なんかにすべきじゃないと思うわ」という国語教師。中には「僕は共修に賛成なんです。実はね、今の高三には去年僕の授業でだいぶ教えたんです。ちゃんと聞いていた生徒は理解してくれているはずですよ。でもね社会科でやるのは限度があるんです。家庭科でね男女共修をして、消費者運動のことや家庭観の変遷とかやってくれれば僕ら社会科の教師がとてもしやすくなるんですよ」と力強い励ましをしてくれた社会科教師もいた。

……☆……☆……

さて興味深々のテレビを見ての感想だが、女子のみ必修側の面々が余りにも力量不足で討論としてはおもしろ味がなかった。佐田氏はまるで官僚答弁みたいなことをただまくし立てるだけだったし、上坂さんは自分の意見を何ひとつ言わなかったし、楠本さんからはパロディみたいなおかしみしか伝わってこなかった。共修側の完封勝ちというところだろうか。それにしても萩昌弘氏の熱弁にはおそれいった。確とした人間教育観を持ち、現

体制を的確に批判していた。彼は家庭科をい

つまでもお料理とお裁縫の科目にしただけでやらせるのは、女をバカにさせておくための政府の功妙な技であることを見抜いている。映画だけを評論させておくには惜しい人材だ(失礼!)

転任してまだ半年にもならない新しい学校だが、これを機会にちよくちよく家庭科をめぐる話し合いを輪を拡げてゆく試みをしよう。そしていつか私の学校も共修になるよう頑張りたい。

出演して思うこと

樋口恵子

この人、に会おうのを私はどんなに待ちこがれていたことだろう。高校長協会家庭部会のある一文以来、私は彼を待ち焦がれていた。実はテレビ朝日で、佐田先生と討論しないかと言われ、私は毎度万障繰り合わせその機会を待っていたのだけれど、毎回直前になってしまうので、私はもうそれだけでアタマがボーッとなってしまう、言うべきことも言えずじまい。結果はごらんの通りです。

それはともかく、ショックな発見がひとつ。

「ああいう方の奥様は、旧制女学校の良妻賢

母」とばかり思い込んでいたら、なんと私が最も評価する市民団体の熱心なメンバーだとう。そういえば、家庭科女子のみ必修の陰の推進者といわれる文部省のお役人も共働きたというし。かかる条件における男性が、社会的にかかる主張をする男性心理の研究というのも一興かと思えます。運動にはときには幕間も必要です、どなたか討論会に参加しませんか。

放送を見たところでは、共修を否定する古い考え方の劣性は明らか
ようですが、反動的な動きはまだまだ強いようです………

古さと新しさが歴然としてきたところ

半田 たつ子

小学館「高校教育展望」九月号の特集「高校教育における男女差の問題」を読んだら、あなたはしばしば虚脱状態に陥るだろう。「局地戦において敗北を重ねた男性軍が、大勢においても樂觀を許さざる状況に追い込まれた」(大橋幸)被害者意識から「男女の違いを口にすればそれだけで男女を差別しているもの」として非難されてしまうという社会的風潮を嘆じ「男女差を無視して教育を改善することはできない」(永野重史)と開き直る。わが佐田彌氏は、中根千枝、犬養道子、沢地久枝、ロベルト・ユンクまで引用し、性差を忘れた教育は戦後教育の落とし子だとの大論文である。座談会で「男女共学についての本当の意味の指導力をわれわれは持っていないんじゃないか」と自認している都立高校長は、家庭科女子必修は「天が与えた使命をやらせるものだ」とさえ思う」と天をも恐れぬ発言。加賀乙彦氏は「国語教育から男女差をつける

べき」「高等女学校をなくしたのは、戦後民主主義の悪平等の最たるもの」と語る。この種の教育雑誌がまかり通る現実。戦後民主主義とは、そも何だったのか？

だが、明るい話題もある。「男女平等と社会慣習」をテーマにした労働省主催、第二回日本婦人問題会議(十一月二日、於サンケイ会館)に、各地の婦人少年室が集めた男女平等を妨げる事例集が配られたが、ここに中・高校の女子のみの家庭科が挙げられ、参加者からも問題視する発言があった。

フォーラムで講師の東大助教授松原治郎氏は、家庭内の両親の機能的役割分化を重視する学者だが、男女の特性についての質問に、「明確な結論が科学的に出されているとは思われない。男性でなければできないとされてきた事柄はかなり否定されるべきである」と言い切った。

十一月五日「世界の福祉を学ぶ」集いで、一番く瀬康子日本女子大教授は「スウェーデンの福祉の重要な柱に、自立と連帯」を重視する教育があり、男女共修の家庭科はスウェーデンでは当たり前のことである。日常生活

と離れたところで文字・数を教えるのは邪道との考えだ」と力強く語った。

新しいものの台頭は、古いものを動揺させ威嚇高にさせ、揺動はなお続くだろう。あるべき未来を今日の中に先取りする歩みを、いっそ確実にしたいと願わずにはおれない。

名古屋の教育委員会は共修に冷淡

七月十三日、名古屋教育委員会で教科書の採択が行われました。

この時、紅一点の徳武とし子委員から「男子にも一人の人間として生きてゆくための最低の生活技術を指導したらどうか」との意見が出されましたが、鳥居学校教育部長は、校長時代、父母から男女の特性にそった教育をもっと徹底すべきだ(暗に女は家庭的であるべきだとおわす)といわれた、と返答。さらに徳武委員が、教育ママに育てられた温室育ちの男子学生が大学進学と同時に親元を離れ、今どき賄いつきの下宿屋はなく、ついふらふらと女性と同棲し、両親があわてふためく事例等を報告されましたが、市教委幹部一同「アッハッハ……」で幕になってしまいました。

「あぐらミニ」8号に掲載の
立木侑代さんの文章から引用
(編集部)

「あぐら」集会でアピール

佐藤 慶子

十月三十一日、埼玉県武蔵嵐山(東上線森林公園の一つ先)に新装の国立婦人教育会館で開かれた「あぐら」の集会へアピールに出かけた。

会場の紹介をしてみると、これは国が六十億の巨費を投じて設立、今秋オープンしたばかりである。婦人の教育・研究活動に広く提供されており、宿泊、研修用の部屋、スポーツ施設、劇場、食堂、託児室と十分な機能をそなえている。広々とした環境とともに、これまでもっと便利などころにあってくれたらと惜しまれる。宿泊費千円は安い、食堂がやや高い。

さて、「あぐら」の全国の読者の中から参加者を募ったこの大会は、動いている婦人と現在精神的・経済的自立に挑戦している主婦たち、そして婦人問題を感じ始めた若い女性とさまざまな方たちの交流会であった。そして、すでに知っている方たちも含め、「家庭科の男女共修」に心からの支援を頂いた。

大阪の「男女共修」の運動

関西グループ——楠崎 留里子

昭和五十二年五月二十七日、関西グループは、大阪府教委よりの連絡で、「高校家庭科の男女共修研究委員会発足」の回答をえた。そこで、そこに到るまでの、運動の歩みを、ふりかえってみよう。

昭和五十一年十二月十八日、教育課程審議会の、「最終答申」発表は、我々も大体の予想はしていたが、やはり、旧態依然たるもので何らの発展性も、誠意も、みられぬものであった。

関西在住の教課審への働きかけから出発した関西グループは、教課審・文部省関係への運動に、漸く、再考すべき時を迎えた。

我々関西グループの「家庭科の男女共修をすすめる」運動は、男女の「個性」の固定した「科学」のメスを入れ、人間として、「自己実現」・「全面発達」の理想実現を目指していることは、今更言うまでもない。

学生・一般市民・家庭科教員・他教科教員等々、あらゆる層が、「家庭科の男女共修をすすめる」と云う大目標で一致し、思想・支

持政党の如何等の小差を指てるところに、「発展と前進あり」と信じて、出発した。関西では、京都府立高校は、京都府教委と一体となり、すでに、家庭科の男女共修の実践を、着実に積み上げてきており、大阪でも心ある府立高校や、中学校など、共修実践の闘いは、底辺から野火の様に、徐々に燃えひろがりつつあった。

昭和五十一年十二月二十三日、「女性差別」に反対する様々な団体による「家庭科の女性差別に反対する実行委」の結成のため、関西グループにもその参加の呼びかけがあった。しかし、関西グループとしては、結果的には、全員一致して参加し協力することはできず、有志による個人参加の色彩が濃厚であった。

この実行委の対面交渉は、昭和五十二年一月十三日に、第一回目があり、大阪府教委側の、理念的な面から「男女特性論」の固執に對し、その「差別的な視点」についての、妥協を許さぬ徹底的な追求が精力的になされた。実行委の一方の側面からも痛烈に出たが、こ

の様に男性を理解ある姿勢に変えたのは、女性側からの「女性差別」に対するきびしい働きかけと、男性・女性共に、長い苦しい自己との闘いがあったことも、ひろうされた。

二月二十四日の第二回目の対府交渉は、府教委・高校長の代表者数名出席のもとに開かれたが、関西グループとしての参加はなかった。そこでは、あの頑固な「男女特異論」はすっかり影をひそめ、「女性差別」への、無知・及び非を認めざるを得なく、驚くべき、一八〇度の転換をもたらした、「男女別学を、

お待たせしました……
いよいよ発行です！

家庭科の男女共修をすすめる会編

《家庭科、なぜ女だけ？》

「男女共修をすすめる会」の歩み

ドメス出版発行

B6判 二八八ページ

定価 一七〇〇円 送料一六〇円

運動の意味、運動の記録、運動の反響
運動の将来展望等……

それに共修の家庭科の実例

国会、文部省関係の資料

国際婦人年関係の資料等……

お申し込みは左記へ

ドメス出版

東京都豊島区駒込一―三五―二 一―七〇

振替東京八―四八七六六

電話 〇三―九四四―五六一

お知りあいの方におすすすめを！

地域、学校の図書館等にも働きかけを！

家庭科の男女共修をすすめる会

関西グループ

行動メモ抜粋

昭和五十二年

一月一三日 家庭科の女性差別に反対する
実行委」と共闘（有志による）、大阪府教
委交渉

一月十五日 校長会家庭部会全員へ抗議文作
成・発送 個人としても抗議活動を行うよ
う会員に呼びかける

一月二十五日 関西テレビで「高校男子に家庭
科は必要か」討論会に出演・藤本氏

二月二十六日 関西テレビ「高校男子に家庭科
は必要か」第二回討論会に出演・三輪氏
二月二十八日 大阪府労働福祉課へ婦人労働実
態調査依頼
四月六日 大阪府・市教委へ要望書、府へ署
名六〇〇名分手渡す

四月一四日 各センターへ自治体交渉、研究
会、高校・生徒・父母へ働きかけの呼びか
け発送

五月二十五日 大阪府教委交渉、前向き回答を
得る

五月二十七日 大阪府教委連絡、共修研究委員
会発足の回答を得る